

ここに生活の科学、第41号をお届けいたします。

早いもので本誌も第41号、人間にたとえると不惑を過ぎ、次の知命に向かって歩みはじめた年齢です。この「不惑」という言葉のもととなった論語の解釈は様々あるようです。「四十にして惑わず」を文字通り解釈すれば、40歳ともなれば人生に悟りが開け、迷いなくなる、と言った意味なのでしょう。しかし、私自身は少し異なる解釈をしています。

平均寿命80歳の現在、40歳といえ、ほぼ人生の真ん中です。丁度、半分生きてきた40歳は、人生の振り返り地点であり、自らの人生を顧みて、今の人生をこのまま進めても良いのだろうか、と問いかける絶好の機会に他ならない（とは言うものの、私自身は当に40歳を過ぎていてもかかわらず、人生の振り返りができているとは、到底言えないのですが……）、と解釈しています。そういえば、はからずも臨床医から本学教員に転身したのが41歳でした。市民病院から女子大学へと環境が変わり、気持ちを新たにして、活気あふれる学生たちとともに教育や研究をはじめたことを思い出しました。今は転身してよかったと感じております。

したがって本誌も、この41年を振り返り、これまで以上に多くの皆様に愛されるためには、今後どうすべきかを考える絶好の機会と捉えています。今、まさに私たち、生活科学部教員が一丸となって取り組むべき課題と考えています。

元来、本誌は衣食住の分野で活躍される先生方に、相山女学園大学生生活科学部の教員が、現在、どのような研究に取り組んでいるのか、さらに、研究成果にはどのようなものが見いだせたのか、を知っていただきたいとの思いから生まれました。ですから、本誌は単なる研究成果の報告書にとどまらず、参考書（授業などのネタ本）としてご活用いただけるよう、分かりやすい解説をこころがけたつもりです。さて、使い勝手は如何でしょうか。繰り返しになりますが、本誌も41号を迎え、今一度その意義、使い勝手などを振り返り、この機会に、本誌のさらなる発展を目指していきたいと考えております。

今回も6名の教員が、それぞれの専門分野に基づいて執筆いたしました。十分にご満足いただけるものと確信しておりますが、さらなる発展のために、本誌に対する忌憚のないご意見を頂戴できれば幸甚です。

平成30年11月吉日